

家族ライフストーリーが語られる場所としての墓地 —— イギリスの19世紀末の家族墓碑と現代の子ども墓碑を中心に

やまだようこ 京都大学大学院教育学研究科
Yoko Yamada Kyoto University, Graduate School of Education

要約

本研究では、イギリスの墓地で観察した墓碑銘の事例を基に、「家族ライフストーリーが語られる場所としての墓地」という新しい見方を提示する。第1には、家族ライフストーリーが語られる「記憶の場所」としての墓地という観点から、死者が亡くなって100年以上たつ古い墓碑を観察し、ハワーズ、ヨーク、オックスフォードの19世紀末の家族墓碑銘を分析した。第2には、生者と死者のコミュニケーションが生々しく進行している「喪の場所」としての墓地という観点から、現代ヨークの市営共同墓地を観察し、特に親や子が死者に語りかける言語的・非言語的メッセージに注目して分析した。本研究の新しい視点は、従来のライフストーリー研究や生涯発達研究の視点とは異なり、「個人の人生」中心の視点から解き放ち、家族関係、世代間連関、生者と死者の関係などの関係性に焦点をあてて「家族ライフストーリー」を見ること、また人生や生の物語（ライフストーリー）を「死の物語」の側から見ることである。墓地の家族ライフストーリーには、少なくとも3つの心理学的機能があると考えられた。1) 個人の人生が逆方向に死を基点として「死」の側から凝縮して語られる、2) 愛する親子という家族物語が繰り返し連鎖的に親近性のある世代によって語られる、3) 生者から死者へ、そして過去世代から未来世代へ、世代や生死を超えた長い時間軸のコミュニケーションが行われる。

キーワード

ライフストーリー、死、語り、墓地、家族

Title

Family Life Stories Narrated on Headstones: Psychological Approaches to The Graves of 19th Century Families and Contemporary Children in Britain.

Abstract

This study analyzed the psychological narratives of family life stories on headstones. First, the family life stories on 19th century family graves were examined in three old towns: Haworth, York, and Oxford. Then, the family life stories of contemporary children's graves in York cemetery were analyzed. Life stories can be studied not only from the events of individuals' lives or from the perspective of life-span development but also from the stories narrated after their deaths. The death stories on headstones have at least three psychological functions: they are simple summaries of individual lives narrated in reverse from the age at death; they contain the chained, repeated expression of family relationships, told using the loving bonds between parents, children, and intimate generations; and they are communications from the living to the dead and from past to future generations with a long time perspective.

Key words

life story, death, narrative, grave, family

I ライフストーリーが語られる場所としての墓地

「墓地の心理学」という本にはまだ出会ったことがないが、墓地を、心理学的視点から見ると、興味深い視座がひらけるのではないだろうか。墓地は、かつて人間が生きてそこに居たことを示す記憶の場所であると共に、人間の力を超えるものと交流する聖なる場所である。そこには、場所自身が何かを物語る「場所の力・地霊（ゲニウス・ロキ）」が働いている（Norberg-Schulz, 1979/1994）。

場所は、つかの間のいのちを生きる人間の生命に比べれば、永遠ではないにしても生きものの命をはるかに超えて長く変わらず存続する。あるいは、長く存続するであろうと願う人間の祈りをたくされる。墓地は、場所のなかの特別の場所、ライフ（いのち・人生）に対する幾重もの意味が重層してこめられた「心理的場所（psychological topos）」である。そこでは、人が、生と死によせる想いが、究極の形、シンプルな形で語られていると考えられる。

本論では、墓地を、ライフストーリー（いのちの物語、人生の物語、やまだ 2000a）が凝縮して語られる場所として、生涯発達心理学とナラティブ心理学の視点からとらえてみたいと思う。墓地には、「人が生まれて死ぬ」という、人間であれば誰でもたどる人生の普遍的なプロセスが縮約して示されているからである。

従来から墓地は、宗教学、歴史学、民俗学、考古学など多くの学問において扱われてきたが、どの学問にとっても狭間にあり、墓地そのものの体系的な資料収集や研究は、ほとんどなされてこなかった。墓地は、宗教史、社会史、思想史などでは歴史資料による研究、民俗学ではローカルな習俗の観察から研究されてきた。

たとえば、日本の民間信仰史や葬制の民俗学（堀, 1953, 1955；柳田, 1929, 1934）の古典的研究においては、マツリ・祭祀との関連から両墓制（埋め墓と詣り墓の分離）など特定の墓の形態や造り方に関心が向けられてきた。その後の民俗学や人類学においても、地域ごとの事例や変異を中心として、両墓制の分布（佐藤, 1971）、石塔や卒塔婆など墓上施設の形態や地域分布（岩田, 2003）などが調査されてきた。それ

らの研究においては、ケガレ、祓い、キヨメ、忌み、カリヤ、モガリなど民俗学的概念から葬送儀礼をとらえる一環としての葬送民俗（近藤, 1982）、祖先崇拜や祖先供養と墓や位牌（Smith, 1974）葬送儀礼と宗教、死生観・靈魂観（木村, 1989；梅原・中西, 1996；山折, 1990）との関連などに、おもな関心が向けられてきた。

海外の研究においても、葬送儀礼や死にまつわる祭祀の文化的ヴァリエーションの調査に関心をもつ人類学的研究（Metcalf & Huntington, 1991/1996）、死生観や靈魂観など宗教的・歴史的視点から墓地を見る宗教史的研究（McManners, 1981/1986）、社会体制や社会構造の変化と死体の処理の仕方や墓地の位置や形態や管理方法の変化をみる社会史的研究（Jupp & Howarth, 1997）などが中心的な関心事であった。それらの研究では、宗教史や社会史や思想史における、特定の時代における死生観や葬送習俗など集合的にとらえられた研究に関心が向けられてきた。

アリエス（Ariès, 1975/1983, 1983/1990）のように、墓を通歴史的な「心性（メンタリティ）」、つまり人びとが死をどのように生きたかを主題とした、文化史・心性史の視点から見る研究は、新しい視点をもちこんだといえるだろう。しかし、それらの研究においても、墓地や墓の形態の時代的特徴の記述に関心を集中しており、墓碑銘に刻まれた個々の人生の記述に言及するような研究は、ほとんどみられない。また、マクマナーズ（McManners）がいうように、その後の研究の多くは、人口統計学的史料が使えて、なおかつ現代との死生観の相異を強調するために、17世紀、18世紀に研究の焦点があてられてきた。

一方、医学や心理学においては、個人を中心にした、死や死に行く過程（death and dying）の研究、死の告知や受容の問題、親しい人を亡くした後の喪の仕事（mourning work）や悲嘆のプロセス、死にかかわる介護者やケアの問題などについて多くの研究がなされ、最近特に大きな関心を集めてきた（Glaser & Strauss, 1965/1988；Kubler-Ross, 1969/1971；Macnab, 1989/1994 など）。

このように、死や死の過程の研究と、その死体の処理（disposal）や墓地の研究は、従来は別の問題意識からまったく別個に考えられてきたといえるだろう。

本論では、それらを一つながりの関心のもとにおき、墓地を、人びとの人生全体を「死」の側から見る生涯発達心理学という新たな視点からとらえてみたい。

やまだは、死をさまざまなフェーズにおいてとらえ、「生者と死者のコミュニケーション」という観点から、死のライフストーリー（いのちの語り）研究を行ってきた。死にゆく者の語りと見送る者の語り（やまだ，2000c），死の現場の追悼の語り（やまだ，2004），死者を亡くして1年以内の語り（やまだ，2000b；やまだ・河原他，1999），死者を亡くして年数を経たあとの語り（やまだ，1997；やまだ・田垣他，2000），死後の世界やたましいの変容イメージ（Yamada & Kato，2001，2004）などを研究してきた。それらの研究は、一般論としての三人称的死や、自分自身の一人称的死よりも、身近な他者との二人称的關係性のなかでの「生者と死者のコミュニケーション」という観点を基礎にした研究であるところに大きな特徴がある。

本研究では、そのような身近な他者との關係性のなかで「死」の側からライフストーリーをとらえる研究という一貫した問題意識のもとで、新たに墓地の「語り」にアプローチしてみたい。墓地をめぐる社会・文化・歴史的な文脈、つまり時代、地域、葬送される人物等によって墓地がどのようにつくられるか、墓にどのような素材が選ばれるか、そこに何がつくられ刻まれるかなど、墓地のディテールは大きく異なっているだろう。しかし、墓地は、「人が生まれて死ぬ」という、ライフ（いのち・人生）の物語を、逆方向から、つまり「死」の側から語ってくれる場所という点では共通していると考えられる。

墓地をライフストーリーが語られる場所として見るとき、そこでは、少なくとも四重の意味のストーリーが語られていると考えられる。

第1には、墓地では「個人の人生」としてのライフストーリーが語られていると考えられる。個人の人生の凝縮されたライフストーリーとして、墓地や墓碑銘を見ることができる。たとえ、亡くなった人の死亡年月日と年齢が簡潔に書かれただけの墓石であっても、それは、その人の人生のもっとも簡潔な要約の一つだといえよう。まして、それが5歳の子どもの墓であったり、20歳の娘の墓であったり、90歳の老人の墓であったりすれば、そこからさまざまな人生を推測する

ことができる。

第2には、墓地では個人を超える「人と人との關係物語」、たとえば生者と死者の關係、世代と世代の關係としてのライフストーリーが語られていると考えられる。死にゆく人や死んだ人は、自分で自分を看取することも葬ることも祀ることもできない。したがって、死者と家族など身近な他者との關係性は、死を考えるときに特に重要な視点だと考えられる。

第3には、墓地は、従来の歴史学や民俗学で扱われてきたように、個人やその家族の人生を超える大きな「社会・文化・歴史的物語」が語られている場所とみなすことができる。そこでは、広い意味での「宗教」「文化」「歴史」「英雄」「村落」などのストーリーが語られている。このような大きな物語は、墓地だけではなく、ピラミッドや古墳や寺や教会など墓地を兼ねた神殿などの建造物、記念碑、殉教者や英雄の像などによって、その当時の人々だけではなく、幾世代も後の人々にまで語り継がれてきた。そこでは、統治者の死であれ、殉教者の死であれ、庶民の死であれ、人々によって死がどのようなものとイメージされているか、人はどのように死んでいくべきかが有形・無形のかたちで示されている。そして、死者の葬り方、墓地の形式などは宗教や死者の社会的地位によって大きく異なり、歴史的な変化も大きい。墓地では、「社会・文化・歴史的物語としての死」、集合的な人々のフォーク・イメージとしての死や、道徳、宗教、規範とかかわる理想像としての死のイメージなどが、それが建造された時代の人々、そして後世の人々に向かって語られているといえよう。

第4には、墓地は、単にそれ自体が何かを記憶した過去の「場所」としてあるだけではなく、「相互行為としての物語」が現に行われている、マツリや葬送儀礼や慰霊行為の場所でもある。人類学や民俗学で観察されてきたように、墓地では、線香をあげる、花を供える、墓参りをするなど、日常生活に組み込まれた儀礼や礼拝が行われている。また、偉大な死者、非業の死者、恨みを残して亡くなった死者を供養し、死者のたましいを鎮めるための儀式、より大規模で組織化された祭りや追悼行事や記念行事や演劇や歌舞が行われる。それら死にかかわる儀礼行為や祀りや祭による物語によって、墓地では、生者と死者のコミュニケーション

ョンが、社会的物語としても、人と人の連関物語としても、個人の人生物語としても、相互行為として繰り返し演じられ、生きたかたちで語られていると考えられる。

本論では、今まであまり研究されてこなかった上記の第1と第2の観点を中心にして墓地を見ていきたい。特に、第1の視点「個人の人生」を、第2の視点「家族との世代連関」「生者と死者のコミュニケーション」など身近な周囲の人々との「関係性」という観点からとらえる。そこで、家族ライフストーリーが語られる場所としての墓地に焦点をあてる。

人はたった一人で生まれて、たった一人で死んでいくと言われるが、実はそうではない。生と死は、もっとも周囲の誰かの世話(ケア)を必要とするライフ・イベントである。生と死は、一人だけではおこなえない。この世に誕生するとき、人は自分の力だけではなく、誰かの介添えによって生まれ、誰かに世話されねば生き延びることができない。死ぬときも、誰かのケアを受ける。たとえ自分では、墓は必要ないと考え、あるいは逆に墓石まで用意万端を整えて、一人で自死したとしても、その死体の処理やその後の家財の始末などは誰かの手にゆだねなければならない。

人間の生と死は、個人の生と死であるだけでなく、人と人、世代と世代をつなぐライフ・イベントである(やまだ, 2000a, 2000b, 2000c)。墓地は、死者を記念し記憶するメモリアルの場であるとともに、生者が死者の記憶を呼び起こして、死者に語りかけるコミュニケーションの場でもある。墓地では、死を悼む生者と死者の記憶とのコミュニケーションの場であり、死者の死を追悼し祈りをささげ、死者の生を記念して後世に伝達しようとする、世代連関や家族連関の物語が語られていると考えられる。

なお本論で「ライフヒストリー」という用語を使わないで、「ライフストーリー」という用語を使うのは、本論の目的が、「家族の歴史」「生活史」を知ることそのもの、つまり時代考証をして「歴史的真相」を明らかにすることにあるわけではないからである。やまだ(2000a)において両用語の使い分けについて議論したように、用語の違いは学問的立場の違いを反映する。本論は、「ライフストーリー」、つまり家族の人生がどのように語られているか、「語られた真相」「物語的真相」

」に関心を向けたナラティブ研究の一環として位置づけられる。

本論の目的は、以下のようにまとめられる。本論では、イギリスの墓地の事例から、「家族ライフストーリーが語られる場所としての墓地」について、次の2つの観点から新しい心理学的なものの見方を提示する。なお、ここでは家族のなかでも特に親子関係に焦点をあてる。第1の観点では、関連する家族がみな死に絶えて記憶・記念の場所となっている100年以上たった古い墓地(19世紀末~20世紀初)をとりあげる。第2の観点では、まだ祀る生者が生存し喪のプロセスが進行しつつある墓地、死者との生きたコミュニケーションがなされている生々しい墓地を対象としてとりあげる。それらの観察事例を基に、第1には、「記憶の場所としての家族(親子)の墓碑銘」、第2には「現代の墓地における生者と死者(親子)のコミュニケーション」という2つの観点から考察を行う。

本研究でイギリスの墓地を事例として取りあげるのは、キリスト教圏のなかでも、異民族に占拠されたり国土が戦場になって壊滅的に変化することがなく、土葬などの葬送形式も現存し、同一場所に数百年前の古い墓碑と新しい墓碑が共存的に現代まで存続しているからである。また、英語圏であるために古い墓碑銘を読むことが比較的容易であること、筆者が長年フィールドワークをしてきた場所なので、ボトム・アップ的に新たな発想を得る現場心理学的研究をしやすかったことがあげられる。

筆者は、青年時代から日本各地さらには世界各地の墓地を長年見歩いてきた。たとえばスイスのマッターホルンのふもとの墓地にある、山で亡くなった人々を悼む墓碑銘「オックスフォード大学生、20歳」などと標された短いことばに魅かれ、亡くなった若者の人生だけではなく、その墓を建てた親の心情を推測してきた。特に数十回にわたって訪れ、比較的長く滞在する機会があったイギリスでは、行く先々で古い教会や墓地巡りをしてきた。しかし、墓地を長年見歩いてきた個人的経験が、学問的研究にむすびついてきたのは、ごく最近である。したがって、ここで記述する墓地の研究は、組織的なフィールドワークの成果というよりも、今まで重ねてきた墓地に関する観察を見直し、新しい視点を提示することを目的とした探索的研究、あ

るいはプリコラージュによる野生の思考 (Levi-Strauss, 1962/1976) といえるだろう。

ここで具体的にとりあげる家族の墓碑は、イギリスのオックスフォードの墓地で 2001 年 7 月～11 月に行った観察資料と、2002 年 9 月にヨーク、ハワース、スカーボローの墓地で観察した資料に基づいている。なお本論では、イギリスという国名を、イングランド (England) という限定された地域の意味ではなく、連合王国 (United Kingdom) をさす日本語の通称として使うことにする。ヨークの墓地は市営の共同墓地 (cemetery)、その他の墓地は、教会所属の墓地 (churchyard) であるが、いずれも百年以上続く古い墓地で現在も使われている。ヨークの墓地は *The Social Context of Death Dying and Disposal 6th International Conference* に参加したときに、現地の専門家に墓地を案内してもらい、墓地の形態の歴史的変遷を観察した。ハワースでは、墓地の観察のほかに、ブロンテ博物館などで関連する遺品資料を閲覧し文献資料も入手した。ほかにも教会や墓地の観察、美術館や博物館などで死に関わる資料収集を多く行ってきたが、古い墓碑銘では判読困難な事例も多い。本論では実際に筆者が現地で観察し、資料として鮮明に提示できる事例に限って取り上げた。本論の視点は、観察時ではまだ明確ではなかった。本論の考察は、2 年後に新たな視点から当時記録した多数の墓碑銘の写真を見直して行ったものである。

II 記憶の場所としての家族の墓碑銘——親子をつなぐライフストーリーと語りの共同生成

日本の墓地では、個人墓ではなく、先祖代々の墓、あるいは**家の墓として、ひとつの墓石に家族の何人かの名前が刻まれた墓石がよく見られる。イギリスの墓地においても、墓石が個人のものではなく、ひとつの墓石に家族の墓碑銘が集合的に刻まれているものは少なくない。そのような形態の墓石では、一度にすべての死者の名が刻まれるのではなく、時間を継いで、次々に死者の名が書き加えられていくことがふつうである。ある死者を祀って、その墓を建てた人物が、次

には自分が死者となって墓に刻まれるという巡り合わせ、世代循環の移り変わりを一つの墓石のなかに見ることもできる。

Ariès (1975/1983, 1983/1990) は、18 世紀末以降、死者は無名性から引き離され家族の手にゆだねられるようになり、「19 世紀と 20 世紀初頭、そして庶民階級においては今日でもなお、フランス人は、よく三代、四代もの人が永眠している家族の墓地に強い愛着を示す」と述べている。イギリスにおいても、家族墓碑を観察する限りでは、同様の事情を推察できる。

ここではまず、おもに 19 世紀末から 20 世紀前半のイギリスの家族墓碑銘の事例をとりあげてみたい。

II-1 ハワースのブロンテ姉妹の家族ライフストーリー

イギリス、ヨークシャーにあるハワースは、小説家のブロンテ姉妹の故郷として有名な小村であるが、現在も「嵐が丘」が書かれた当時とあまり変わらない風景のなか、古い面影の村が残されている。ブロンテ姉妹については伝記的資料が残されているので、かなり詳細な家族ライフストーリーを構成することが可能である (Howard, 1995 など)。

父のパトリック・ブロンテは、北アイルランドで 10 人兄弟の長男として生まれた。貧農であったが成績は優秀で、徒弟奉公や家庭教師をした後、奨学金などを得て名門ケンブリッジ大学のセント・ジョーンズカレッジを卒業し、イギリス国教会の聖職者になり、ヨークシャー地方に移住した。彼の正確な本名はわかっていないが、カレッジに残されている彼の姓は、Brants, Bronte, Bronté, Brontë と変化している。彼は最終的に、ギリシア風の文字を用いた最後の名字にした。貧しさゆえに、アイルランドから海を渡った後、ケンブリッジまでの長い道のりを歩いたと伝えられている彼は、当時としては、きわめて異例の出世をしたわけであるが、この創作的な改名を行った経過をみても、彼が自分の出自に深いコンプレックスを抱いていたことは容易に想像できる。

母のマリア・ブランウェルは裕福な商人の娘で、学校の助手をしていてパトリックと出会い、彼が 35 歳、彼女が 29 歳のときに結婚した。1812 年、長女マリア

誕生, 1814年, 次女エリザベス誕生, 1816年三女シャーロット誕生, 1817年長男パトリック・ブランウエル誕生, 1818年四女エミリー・ジェイン誕生, 1820年五女アン誕生。

1820年1月17日にアンが生まれた直後の2月に, 父はヨークシャーのハワース教区の牧師となり, ハワースの牧師館に一家で引っ越した。その半年後, 母が床につき, 1821年9月15日癌のため死去した。看病にきていた母の姉エリザベス・ブランウエルが, 以後そのまま同居して家事を行った。

1824年にマリア(11歳), エリザベス(9歳), シャーロット(8歳), エミリー(6歳)は, ランカシャー地方のカウアン・ブリッジ寄宿学校に入学した。エミリーは最年少の生徒であった。現在でもイギリスでは, 裕福な家の師弟は幼いときから寄宿学校に入ってエリート教育を受け, ケンブリッジやオックスフォード大学では, そのような師弟が大多数をしめている。自分ではそのような教育を受けられなかった父は, 子どもには人並みはずれて教育熱心となった。しかし, 娘たちが入った寄宿学校は, エリート校とはほど遠く, 授業料が安いかわりに食事も劣悪で暖房も十分になく神の名のもとに冬でも一日歩かされるという厳しい環境であった。

1825年に上の娘たちマリアとエリザベスは, 栄養失調から急性肺結核になって, 5月と6月に相次いで死去した。シャーロットとエミリーは, 寄宿学校をやめて家にもどり, 兄のブランウエルと妹のアンと4人で, 父のみやげの兵隊人形などで創作あそびをした。このころのお話づくりの楽しいあそびの様子は, ブロンテ家族の家がそのまま資料館となって現在まで残されているが, その共同あそびが後の創作活動に結びついていったといわれている。

その後, シャーロットは「ジェーン・エア」, エミリーは「嵐が丘」, アンは「アグネス・グレイ」を代表作とする小説家になった。当時は売れなかったが, その後に彼女らの作品は世界的に有名になり今も長く愛読されている。一家の期待を担っていた長男ブランウエルにも, 絵画や文学の才能があったが, 彼はそれを生かし切れず, 最後はアルコールに溺れて悲惨な生活をした。彼は, 画家になるためにロンドンのアカデミーまで行ったが, 一歩も入れずにハワースに戻って



図1 ブランウエルが描いたブロンテ姉妹
左からアン、エミリー、シャーロット。真中
にあったブランウエル自身の自画像は、後か
ら消されている。

きてしまったと伝えられる。彼が描いた3人姉妹の美しい肖像画があるが(図1), その中央にはもともと自分自身の肖像が描かれていた。しかし, 現在残っている絵では, その中央部の人物は絵の具で消されてしまい, かつて像があったことがわかる「不在の影」だけが残っている。立身出世を果たした教育熱心な聖職者父のもとで, 6人の子どものうち唯一の男子, 才能がありながら自ら潰れていってしまったブランウエルの心境が表れた絵である。

ブランウエルは, 酒浸りの荒んだ生活をつづけたあげく, 1848年9月24日に31歳のとき自宅で急死した。エミリーは, 兄の葬儀で風邪をひいてこじらせ, 3か月後の1848年12月19日に30歳で死去した。末娘のアンも同じ病気で倒れ, スカーボローで1849年5月24日, 29歳で死去した。シャーロットは, ベルギーのエジェ寄宿学校で英語教師をしたときエジェ教授に恋をしたが報いられず, それが「ジェーン・エア」のモデルになった。その後, 父の反対を押し切って1854年6月29日に自分を思慕していたニコルズ牧師補と結婚した。しかし, 結婚後1年もたたないうちに, 1855年3月31日, 風邪がもとになって39歳で死去した。

ブロンテ家族のライフストーリーを、伝記資料をもとに、ごく簡単にたどると以上のようなものになる。

II-2 ハワースのブロンテ姉妹の家族墓碑銘

ブロンテ姉妹の家族が葬られている墓所は、父の勤務先であり家族の住居であったハワース教会にある。ハワース教会の壁にある家族墓碑銘を、先に資料から構成したブロンテ姉妹の家族のライフストーリーと比較してみよう。この家族墓碑銘は、教会の壁に記念プレートとして後でつくられたものであるが、あとでヨークのターク家の家族墓碑に示すように、基本的な様式はよく似ている。

ハワース教会の壁にある事例 1 (図 2) の墓碑銘は、死者の名前と続柄、亡くなった年月日と年齢が記されているだけの簡潔なものである。しかし、死者が生前何をしたかという業績や、どのような人生を歩み、どのような病によって、どのような想いを抱いて亡くなったのかというような感情や思い入れが一切省かれているだけに、かえって「死の事実」だけが圧倒的な迫力をもって迫ってくる。

通常のライフストーリーと墓碑銘のストーリーの相異として気づくことは、まず第 1 に、「死」の年月日が中心となっていて、人生が「死」を基点に逆向きに語られていることである。通常の自伝や伝記の語り方では、通常は主人公の誕生から、あるいは誕生以前の両親から時間的な順序にそって順向の時間軸にそって人生が語られる。もちろん、最期の死が最初に書かれる伝記もあるが、それは物語の効果を劇的にするためのレトリックであり、墓碑銘のように、死の年月日は詳しいのに、それと比較して、生年月日が省略されるというような極端なアンバランスはみられない。

私たちが自分の人生を生きているときにも、ライフストーリーを語るときにも、厳密な意味で「死」を基点にすることは、ほとんど不可能である。計画した自殺以外は、死期をさとることはできても、死の正確な年月日を自分では知ることができないし、記すことはできない。

墓碑銘に記される当事者は、「死者」である。それは、当たり前のことのようにみえる。しかし、墓碑銘を記す当事者がいることを忘れてはならない。それは、

「生者」なのである。墓碑銘は、生者が死者を悼み、記憶し、祀るためのものである。極論すれば、墓も墓碑銘も、生者のためにある。

生きているときは、誕生日(生年月日)が重要であり、他者も誕生日を祝ってくれる。私たちは誕生日を基点として、順向の時間の流れにそって自分の人生を生きて、年齢を数えていく。しかし、死んだあとは、命日(死亡年月日)が重要になる。戸籍には、誕生日と命日の両方が対等に書かれるが、墓碑銘には、命日のほうが圧倒的に多く刻まれやすい。命日は、死の世界への誕生である。死者は、生者によって命日を記憶されるが、その日付は、自己のものであるとともに他者のものであり、自己と他者との関係性のなかで記され語られる日付である。

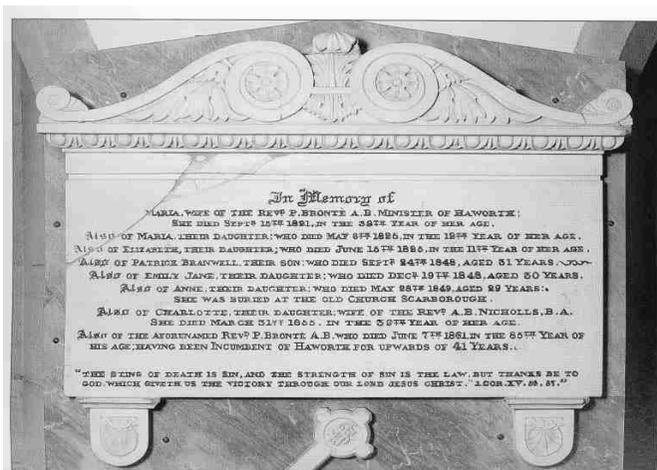
第 2 には、特に家族墓碑においては、一人の人間が生まれて死ぬという人生プロセスが一人だけで行われるのではなく周囲の人々、特に家族のつながりのなかで行われることを、端的に凝縮したかたちでまざまざと見せてくれる。

事例 1 (図 2) のブロンテ家族の記念碑に並列された、死亡年齢の列記には、圧倒させられる。栄養状態や衛生環境(飲水に問題があったといわれる)が悪く、死亡率が高かった時代とはいえ、6 人の子を産んだ母親は 39 歳で亡くなり、6 人の子のうち、2 人の娘は 11 歳と 12 歳、あとの 4 人も 20 代終わりから 30 代で死亡している。いちばん長生きしたシャーロットでさえ、39 歳で死亡し、その後に子孫を残すことはできなかった。

そして、たった一人、すべての家族が死亡したあとに、父親だけが 85 歳まで生きながらえたことが示されている。ブロンテ姉妹の伝記では、多くの場合、姉妹の作品に焦点があたるので、作品と関連する部分が詳しく語られる。早世した 2 人の上の姉妹や兄のプランウェルのことはかろうじて語られることがあっても、その後の父親の死亡年月日まで語られることはほとんどない。墓碑銘では、端的に死亡年月日と住んだ場所と職業が述べられているにすぎないが、有名なエミリーやシャーロットの立場からではなく、父親の立場にたって彼の人生の物語を読み解いてみたいというような新たな視点をえることができよう。

第 3 には、家族墓碑では、上記のように家族が並ん

事例1 (図2) イギリス, ハワース教会のブロンテ家族の墓碑銘



In Memory of

MARIA, WIFE OF THE REV. P. BRONTË A.B. MINISTER OF HAWORTH;
SHE DIED SEPT. 15th 1821 IN THE 39th YEAR OF HER AGE

ALSO OF MARIA. THEIR DAUGHTER; WHO DIED MAY 6th 1825. IN THE 12th YEAR OF HER AGE.

ALSO OF ELIZABETE. THEIR DAUGHTER; WHO DIED JUNE 15th 1825. IN THE 11th YEAR OF HER AGE.

ALSO OF PARRICE BRANWELL. THEIR SON; WHO DIED SEP. 24th 1848. AGED 31 YEARS.

ALSO OF EMILY JANE. THEIR DAUGHTER; WHO DIED DEC. 19th 1848. AGED 30 YEARS.

ALSO OF ANNE. THEIR DAUGHTER; WHO DIED MAY 28th 1849. AGED 29 YEARS.

SHE WAS BURIED AT THE OLD CHURCH SCARBOROUGH.

ALSO OF CHARLOTTE. THEIR DAUGHTER. WIFE OF THE REV. A. B. NICHOLLS. B. A.

SHE DIED MARCH 31 1855. IN THE 39th YEAR OF HER AGE.

ALSO OF THE AFORENAMED REV. P. BRONTË A.B. WHO DIED JUNE 7th 1861 IN THE 85th YEAR OF HIS AGE; HAVING BEEN INCUMBENT OF HAWORTH FOR UPWARDS OF 41 YEARS.

“THE STING OF DEATH IS SIN, AND THE STRENGTH OF SIN IS THE LAW, BUT THANKS BE TO GOD, WHICH GIVETH US THE VICTORY. THROUGH OUR LORD JESUS CHRISIT. 1COR.XV.56.57.”

(次のものたち)を追悼して

マリア, P.ブロンテ・ハワース教会牧師の妻

彼女は1821年9月15日に39歳で死去した。

また, マリア, 彼らの娘; 1825年5月6日に12歳で死去した。

また, エリザベス, 彼らの娘; 1825年6月15日に11歳で死去した。

また, パトリック・ブランウェル, 彼らの息子; 1848年9月24日に31歳で死去した。

また, エミリー・ジェーン, 彼らの娘; 1848年12月19日に30歳で死去した。

また, アン, 彼らの娘; 1849年29歳で死去した。

彼女は, スカーボローの旧教会に埋葬された。

また, シャーロット, 彼らの娘で, A.B.ニコルズ牧師の妻。

彼女は, 1855年3月31日39歳で死去した。

また, 先に名を記したP.ブロンテ A.B.牧師は, 1861年6月7日に85歳で死去した。

41年以上もハワース教会司祭であった。

「死の棘は罪である。罪の力は律法である。しかし感謝すべきことに, 神はわたしたちの主イエス・キリストによって, わたしたちに勝利を賜ったのである。コリント人への手紙 15章 56-57」

だ定型的な語り様式をもっていることが多いので、その定型からはずれた語り口を見いだすことが容易であり、そこには興味深い物語が秘められている可能性がある。ブロンテ家族の墓碑では、アンの場合がそうである。アンは、ハワース教会にはなく、スカーボローの旧教会にあると記されている。そこで、次に家族の墓地から離れた場所にあるアン個人の個人墓碑について調べるために現地へ行った。

II-3 スカーボローにあるアン・ブロンテの個人墓碑——「場所」の風景

アン・ブロンテは、なぜ、父が牧師を勤め長年住んだハワース教会の墓地ではなく、家族のなかで一人だけ別のところに眠っているのだろうか。アンは、スカーボローに長年移り住んでいたのだから、そこに埋葬されたのだろうか？ そうではなかった。

アンは、兄のブランウェルが急死した3か月後に亡くなったエミリーと同じように、病気（肺結核）で倒れて、衰弱していた。死期をさとしたアンは、医者が止めるのもきかず、病をおして強行に東部の海辺の町スカーボローへ行くことを強い意志で望んだのである。彼女は、途中ヨークに立ち寄って、ヨーク・ミンスターを訪れたあと、スカーボローの崖の上の海が見えるロッジにたどりついて床についた。

アンは死の3日前に無理な身体で、最後に海の砂の上を歩くことを望み、砂の感触をいつくしんだといわれる。彼女は、静かに春の夕日を眺めたあと、1849年5月24日に死去した。こうして彼女だけは、家族と離れて、海が見える小高い丘の上にあるスカーボロー旧教会の墓地に埋葬されたのである。

事例2(図3)は、スカーボローにあるアン個人の墓碑銘である。この個人墓碑は、父親が(姉のシャーロットと共に)建てたものだとされる。アン個人の墓碑には、父がヨークシャー・ハワース教会の牧師である旨がわざわざ記されている。父の胸には、長年家族と暮らしたハワース教会ではなく、家族と離れ知人もほとんどいない場所で、若くして亡くなった末娘への複雑な想いが去来したであろう。この墓碑では、年齢が28歳と(たぶん誤って)書かれており、後に建てられた家族墓碑の記載とは年齢が異なっている。

アンはなぜ、死の場所としてあえて海辺のスカーボローを選んだのだろうか。彼女は家庭教師をしていたときに、保養地であるスカーボローに行ったことがあり、海辺にあこがれをもっていたようである。アンの小説「アグネス・グレイ」(Brontë, 1847/2001)や「ワイルドフェル・ホール」(Brontë, 1848/1996)には、浜辺の風景が特別な意味をおびて描かれており、彼女は「浜辺で朝日を仰いでいる女性」の絵も描いている(図3右側下を参照)。実際に現地を訪れて風景を眺めてみると、彼女の気持の幾分かは理解できるように思われた。

スカーボローの風景は、彼女が生まれ育ったハワースの風景とある種の共通点をもっている。平坦な土地が多いイギリスでは珍しく、ハワースは急な崖と小高い丘の上にあるが、スカーボローも急な崖と小高い丘の上にある。そして丘の上からは、広々とした景色が幾重にもひろがって眺められる(図3の右側上の写真参照)。しかし、相違点も大きい。ハワースでは、ひろびろと開ける景色、どこまでもうねりながら続くのはヒースの茂る荒れ地である。それに対してスカーボローから見える風景は、明るいまぶしい陽光がきらめく海であり、海辺にはやさしい砂浜がある。

ハワースという特別な場所、「荒ぶるたましい」が暗躍する場所と心中するように生きた姉のエミリーとは違うものを、アンはスカーボローで希求していたのかもしれない。

エミリーは、生涯ほとんどの時間をハワースにこもって住み、ハワースの丘の散歩を愛し、「嵐が丘」(Brontë, 1847)という場所の化身のような物語を書いた。「嵐が丘」の原題 *Wuthering* (スコットランド方言でざわざわと嵐が吹きすさぶ) *Heights* (高み) ということだが、その雰囲気をよく伝えている。ハワースの丘は、天候の良いときは見渡す限りひろびろと視界が広がっており、すばらしく美しいこの世の天国といえるほどの風景が連なっているが、一転して天候が急激に崩れると、容赦なく激しい風が吹きすさんで地獄となり、住民でさえ道に迷ってしまう。丘の上は、作物はおろか、樹木さえ歪んでまっすぐに育たない荒れ地である。エミリーは、「嵐が丘」という、人間の知や情を超える理不尽な嵐が吹く土地の小説、世代を超えてつづく深い愛と激しい憎しみと恨みがえんえん

事例2 (図3) イギリス、スカールボローにあるアン・ブロンテの個人墓碑



LIE THE REMAINS OF
ANNE BRONTË
DAUGHTER OF THE
REV. P. BRONTË,
Incumbent of Haworth Yorkshire,
She died Aged 28
MAY 28 1849



アンの故郷、ハワースの風景



日の出を仰ぎ見る女性 (アン・ブロンテ画)

アンが描いた浜辺の風景 (浜辺で日の出をあおぎ見る女性像、アン・ブロンテ画、ブロンテ全集9「ワイルドフェル・ホルの住人」月報7 みすず書房より)

(次のものの) 遺体が眠るところ
アン・ブロンテ
(次のものの) の娘
P.ブロンテ牧師
ヨークシャー、ハワース教会司祭
彼女は28歳で死去した
1849年5月28日

と連繫した小説を描いて、そこで亡くなった。

アンは、「アグネス・グレイ」の最終場面に、陽光にみちた海辺の風景の魅力と、その穏やかなやさしさを描いている。そこには、「明るいきらきらした光と、新鮮な空気」がある。また、海の砂は、人が足跡をつけても波がやってきて、足跡はすぐに消え去って新しくなる。

「空と海の深い、すがすがしい青さ、輝く朝の陽差しは、緑にうねる丘陵地の下のごつごつした岩肌を見

せる、半円形に入り江を囲む絶壁の上や、滑らかな広い浜辺に照り返り、遙かに見える海に突き出た低い岩礁の上にも、降り注いでおりました。」「私の足跡が、固く崩れていない砂地に最初につけられた痕跡でした。昨夜の満ち潮が昨日のどんなに深い穴もすっかり消し去ってしまい、真っ平にしてしまってから、引き潮がその後にくぼのように凹んだ水たまりと、小さい流れの跡をとどめている以外は、この砂浜を踏みつけたものは何もありませんでした。」

海の砂の上を歩く感触を彼女はたいへん愛しており、死の3日前にも無理な身体で砂の上を歩きたがったといわれる。アンが想い描く海辺は、フレッシュな光と空気と砂のある場所である。ハワースの激しい連綿とした深い執着がこもる「嵐が丘」に比して、アンがスカーボローで求めたものは、やさしい繊細な「海の砂」だったのかもしれない。海の砂はもろく頼りないようであるが、人が生きた跡やつけた足跡さえ、波がすぐに消してしまい、常に新しくなる。

アンは、ハワースの激しく重い連繋のなかの家族物語から、ひとりで脱出しようとしたのではないだろうか。海に見える小高い丘に、ひとりひっそり葬られているアンの墓を見ていると、彼女が望んだ場所に葬られてよかったという気持ちと共に、実は彼女にとっては墓などどうでもよかったのではないかという気持ちもわいてくる。それほど、ここでは風景が大きな意味をもっている。彼女のたましいが死に瀕して希求したものは、この風景そのものだったのではないかと思われる。故郷を抜け出たアンのたましいは、故郷の嵐が丘の風景にとけこんでいるように見える姉のエミリーのたましいと同じように、すでに場所の風景と一体になっている。

人間の生も死も、それ単独で存在するというよりは、場所のなかに入れ子のように埋め込まれているのかもしれない。人間が居なくなっても、人間が造った墓場や建造物がなくなっても、場所は残る。場所のほうが根元的な存在である。永遠に少しでも近づけようとする堅固な墓石も、墓碑銘も、いつかは崩れ落ちる。墓地の究極のかたちは、土地であり、風景だろう。

固い石で墓石を建造し墓碑銘を刻んでモノやことばを後世まで残そうとする石の文化に対して、歳月のなか無言で朽ち果てて消えていくことをよしとする木の文化がある。前者と後者では、自然観も、ライフストーリーを語るという概念も異なっている。前者では、人間は自然に対立するものであるから、自然の風化や退化に逆らって、墓石を含めた人工の建造物やことば、その人が生きた痕跡を、できるだけ長く「永遠」に残そうとする。後者では、人間も大きな自然の一部であるから、死によって消えていくのは自然のことであり、人間が生きた痕跡も大きな自然のなかに解消されて沈黙のなかに消えていけばよいと考える。

日本は基本的には木の文化であるが、墓に関しては石を使ってできるだけ長く残そうと考えるし、もう一方では、墓碑銘が苔むし朽ちて風化し、誰の墓かわからなくなっても、それはそれでよしと考える。墓に關しての想いは複雑で、簡単に2元分割した文化論は通用しないだろう。それは、イギリスの墓においてもいえることである。

木のトーテムポールや墓碑を、それが元々あった場所や風景から切り離して、博物館で保存しようとする人々に対して、カナダ、アラスカ国境の島に住む人々は次のようなことを言ったという。自然のなかに聖なる風景を見ていたアンが、もし現代に生きていたら、似たようなことばを発するかもしれない。

その土地に深く関わった霊的なものを、彼らは無意味な場所にまで持ち去ってまでなぜ保存しようとするのか。私たちは、いつの日かトーテムポールが朽ち果て、そこに森が押し寄せきて、すべてのものが自然の中に消えてしまっていていいと思っているのだ。そしてそこはいつまでも聖なる場所になるのだ。なぜそのことがわからないのか。」

(カナダ・クィーンシャーロット島のハイダ族のことば、星野道夫『森と氷河と鯨』1996, p.39)

II-4 ヨークのターク家の家族墓碑

今まで考察してきたように、家族墓碑銘は、単純な記載から豊かなライフストーリーを私たちに語りかけてくれるし、それは他の資料とつきあわせた場合にさらに豊穣になると考えられる。

無名の人々の家族墓碑の場合には、ブロンテ家族のような伝記的資料が残されていないから、詳細なライフストーリーを知るには限界がある。しかし、逆に、無名の人々のライフストーリーに迫るには、墓碑を資料にするほかない場合もある。足りない部分は、資料のある事例や他の墓碑と関係づけながら見ていくことができるだろう。

純粋に家族墓碑だけを見ても、心理学的に意味のある考察が可能な、興味深い墓碑を見つけることはできる。以下、そのような事例をいくつかとりあげてみよう。

事例3 (図4) イギリス, ヨークのターク家の家族墓碑 (1987年-1915年)



| | |
|---|---|
| In Affectionate Remembrance of EIIZABETH MS TURK DIED JULY 27 1878 AGED 51 YEARS | (次のものへ) の愛情の思い出のために エリザベス MS ターク 1878年7月27日死去した 51歳 |
| WILLIAM ALEX DIED APRIL 1. 1853. AGED 2YR | ウィリアム・アレックス 1853年4月1日死去した 2歳 |
| GEORGE 600 MAR.1. 1863 00 | ジョージ 1863年3月1日 00 6歳 |
| AGENS 200 AUG.25 00 00 | エージェンズ 8月25日 00 2歳 |
| CHILDREN OF THE ABOVE ALSO ALEXANDER. YOUNGEST SON OF THE ABOVE DIED SEPT .27. 1881 AGED 15 YEARS | 上記のものの子どもたち また アレクサンダー 上記の一番末の息子 1881年9月27日死去した 15歳 |
| ROSEY MS TURK 1885 AGED 42 | ロゼイ MS ターク 1885年 42歳 |
| JOHN MS TURK 1911 AGED 56 | ジョン MS ターク 1911年 56歳 |
| ALEXANDER MS TURK DIED JUNE 1915 IN HIS 90 YEAR | アレクサンダー MS ターク 1915年6月13日死去した 90歳 |

事例3 (図4) は、イギリス, ヨークシャーの古都ヨーク市の墓地の家族碑の一例である。ブロンテ家族よりも少し後、19世紀後半から20世紀初頭を生きた人々の墓である。この家族の場合にも、妻が先頭に書かれていて、最後には夫が書かれるという墓碑銘の形式はブロンテ家族のものとよく似ている。しかし、公共の場である教会に、戒めと神への感謝のことばと共に掲げられている記念碑の意味が強いブロンテ家族のものに比べると、より私的で、家族への愛情がよくあらわれている家族墓碑である。

この墓碑は、死去した順につくられたというよりも、最初に書かれた母親(妻)の死後か、中央に大きく面積をとって書かれた15歳の末の息子を失った後に、父親によってつくられたのではないかと推測される。

母親(妻)は、51歳で亡くなっているのだから、当時としては早世とはいえない。彼女は、幼い子ども3人を幼児期に亡くしている。立て続けに亡くなった子どもたちは、流行病だったのだろうか、この幼い3人の子どもたちの墓碑銘は母親を中心とした内容の文章で書かれていることや、文字も小さく文面も簡単に省略されてまとめて書かれていることから、母の死後に、

彼らの死後数十年もたってから一緒に記したのだろうと推測できる。

しかし、アレクサンダーという名の子どもは、違っている。彼だけは、定型からはずれた語りがなされている。彼の名前の位置やスペースや説明が家族のなかでは、破格の位置をしめるからである。彼は母親が39歳ころに生まれた最後の息子で、父親と同じ名前を与えられている。母親(妻)を失った3年後に、この息子を15歳という大人になる直前の年齢で失った悲しみが、墓碑からは伝わってくる。たぶん彼は、末っ子として愛され、たくましい青年として育っていた期待の息子であったのだろう。

その後に記された女性と男性の二人は、たぶん成人した子ども夫婦ではないかと推測されるが、簡潔に死去の年月日と年齢だけが書かれているだけなので、家族のなかで、どのような関係なのかは正確にはわからない。これらの人々は、亡くなった時々に、墓碑に名前を追加されたのであろう。

そして、この家族の場合にも、ブロンテ家の父親のように、父親がもっとも長生きして最後に葬られている。たぶん、この父親がまだ壮年期に建立したのである

事例4 (図5) イギリス、オックスフォードの天使像の家族墓碑



(全体) (1911年-1933年)



台座部分

In Her Loving Memory of
MARGARET (MARCIE) W. BEESLEY
CALLED HOME DEC. 16th 1911
INTO THE LIGHT BEYOND
AGED 17 YEARS
ALSO OUR BELOVED FATHER
CHARLES BEESLEY
AT REST MAY 6th 1933. AGED 79
“AND WITH THE MORN THOSE
ANGEL FACES SMILE
WHICH WE HAVE LOVING SINCE AND
LOST A WHILE”

(彼女の愛する記憶のために
マーガレット (マーシィ) ・W. ビーズレイ
1911年12月16日に故郷に召された
光の向こうの中へ
17歳
また、私たちの愛する父親
チャールズ・ビーズレイ
休息する 1933年5月6日 79歳
“そして、私たちが長く愛し、しばら
くのあいだ喪失した
天使の顔がほほえむ朝と共に “

う墓に、約40年後に、いちばん最後に葬られて、この家族墓碑の物語がしめくくられているのである。

この家族墓碑は、約40年という長い年月をかけて、建設した当人も、どのような物語ができるかわからなかったはずの、予測できなかった部分が次々に書き加えられていったもので、ストーリーが生成されるプロセスを物語っている。老いた父親は、当時としては特別に長生きしたが、その分、先だった多くの死を見届けた人物ではなかっただろうか。そして、その父親の死を葬って、彼の死去の日付を墓碑に標した人物は、この墓碑には名を残していない。この家族物語には、隠れた他者も共同参画している。

家族物語は、父親の死で閉じてしまうわけではなく、他者を生成的に巻き込んでいく。約100年後に偶然に墓地でこの墓石を見つけ、苦労して読みにくい字を判読しつつ、この家族に想いをはせながらこの論考をまとめている筆者自身も、また、この家族物語に巻き込まれた他者の一人である。

II-5 オックスフォードの天使像の家族墓碑

次の事例4(図5)は、イギリスの大学町、オックスフォードのなかでも古い地域、ヘディントン石切場保存地区の小さい国教会の墓地にある、19世紀前半の家族墓碑である。この墓碑は、少し特殊なものだが、家族墓碑のなかでも芸術性の高い、あふれる愛が感じられる傑出したものだと考えられる。

図5のような、かれんな姿をした天使の彫像の下の台が墓碑になっている。この墓碑は、17歳の娘マーガレットを亡くした父親が建てたもので、通常の墓碑にはみられないマーシィという通称もつけられている。この名を何度となく呼んで育て、亡くなったあとも、繰り返し呼んでいたであろう。美しい娘ざかりを亡くした父親の悲痛な気持ちが、この愛称を記さずにいられなかった気持として表れているように感じられる。

また、限られたスペースに書かれた「故郷(ホーム)に帰る」「光の向こうの中へ」ということばも、父親が娘の行く末に家庭のようなやすらかさや光を願



図6 オックスフォードの別の天使像の家族墓碑



図7 現代イギリス、ヨークの墓地にある家族墓碑銘の始まり（下部が空白） 2000年

う祈りが感じられる。墓碑には、聖書のことばや決まり文句が書き付けられることが多いから定型表現があるが、それでも、定型の中からのことばを選択するかによって、その人が死者に向けた願望や祈りがうかがえる。台の下には、「私たちが長く愛し、しばらくのあいだ喪失した、天使の顔がほほえむ朝と共に」という娘に対するあふれる気持ちが短い詩句によって綴られている。

マーガレットの名前の下に刻まれているのは、この墓碑をつくった父親の名前である。約22年後に亡くなった父親を葬ったのは、成人した子どもたちである。たぶん、この父親は、この墓石をつくったとき既に、自分の名前が刻まれる空間をあけておき、子どもたちにも遺言していたのにちがいない。父親の気持ちを受け継いだ子どもたちも、「愛するお父さんへ」ということばを贈り、死去という通常のことばを避けて、「休息」ということばを慎重に選んで刻んでいる。あたたかい愛のやりとりが感じられる仕合わせで美しい家族墓碑銘である。

なお、このように天使などをかたどった芸術性の高い彫像を墓碑にすることは、他にも多々例をみることができる。図6は、やはりオックスフォードの古い国教会墓地にある類似の一例である。図6では、十字架を片手に持ち、もう一方の手をあげている天使の羽の

後ろに、たぶん女性である死者の墓碑銘が細かく刻まれているが、今では風化して判読することができない。そして台座には、女性の死後に後年追加された、**WILLIAM KIMBER** という男性の名前の墓碑銘が刻まれている。

今まで取り上げてきたのは、19世紀末から20世紀前半までの古い家族墓碑であった。しかし、このような形式の家族墓碑は、現代においても作られつづけている。

図7は、ヨークの墓地で2000年に作られた新しい墓であり、これから家族ライフストーリーが生成されていく始まりを示している一例である。このように、まず一人の死者の名が一番上に刻まれ、その下に死者の名が順次つけ加えられるように、あらかじめ空白をつくって建造されることがふつうである。

このように家族墓碑は、あらかじめある程度の様式とレトリックを与えられているが、それが完成される時、実際にどのような形になるかはまだ誰にもわからず、何十年かかるかもわからない。しかし、人生を待ち受けている死が、いつどのように訪れるかはわからないが、いつかは誰にでも訪れるから、必ず墓碑の空白は埋められていくはずである。墓碑にあけられた空白は、単なる空白ではなく、そこに参る家族に物語を想像させてくれる。その物語は、まだ家族が無事で

自分にいのちがあることを感謝し、やがていつかは自分にも死が訪れることをすこしずつ実感として準備させてくれるだろう。死者の運命と、墓碑に名前や命日を刻んで死者を弔う生者、それらの人々と運命や時間との共同生成によって、長い時間をかけて墓碑ができあがっていくのである。

III 現代イギリスの墓地にみる生者と死者のコミュニケーション——親の墓と子どもの墓にみる死者へのメッセージ

「家族ライフストーリーが凝縮された場所としての墓地」をテーマにした今までの論考では、おもに 19 世紀後半から 20 世紀初めの古い墓を事例にしてきた。それら古い墓においても、そこを訪れる人々に今でも何かを伝える力をもっているから、墓地では生者と死者とのコミュニケーションが、常に新たななかたちで生成されつづけるといえる。しかし、どちらかといえば、古い墓は「記憶の場所」としての心理学的機能のほうが強いだろう。

古い墓では、家族の死は、たとえその家系の者や後継者が何代も後の現代に今も生きていたとしても、喪のプロセスを終えて「死者」が完全に死に、「死者」として墓場のなかに安定して位置づけられている。日本文化のことばでいえば、それらの死者は、「死者」というよりは、もうすでに「先祖」や「祖霊」の領域に入っているのである。古い死者のたたりや幽霊などを蘇らせる伝承や語りが特別になされる場合を除けば、1 世紀以上前に亡くなった人々の死は、今ここで生きている自分たちの人生と、生々しく切りむすんで、今ここにいる人々の感情を激しく揺るがしたり、喪失の悲しみに浸らせることは少ないだろう。古い墓地は、「記憶の場所」であり、「死者」は、「祖先」「歴史上の人物」として物語られる。

それに対して、死後それほどの年月がたたない新しい死者の墓場は、別の心理的機能のほうで、よりドミナントに働くと考えられる。死者を埋葬してから間もない新しい墓場は、死者の家族にとっては、「喪のプロセス」が進行していく「喪の場所」である。まだ死

者の記憶も生々しく、喪失の感情も大きいゆえに、墓場は、さまざまなかたちの「生者と死者のコミュニケーションの場所」という機能をより強くもつと考えられる。以下においては、特に「喪の場所」としての墓地における生者と死者のコミュニケーションについて、2000 年代に造られた新しいイギリスの墓、そのなかでも生者と死者が「親と子」という親密な関係性をもつ墓をとりあげて、その特徴のいくつかを考えてみたい。

III-1 現代の墓地にみる生者と死者のコミュニケーション——娘から亡き母へのメッセージ

最初にあげる事例 5 (図 8) は、イギリス、ヨークの市営墓地で見つけたものである。埋葬されて日が浅く、埋められた土の上に花が飾られ、木の簡単な墓標がおかれているだけで、墓石はまだつくられていない。図 8 のように、木の墓標に簡便にビニールで覆った紙がとりつけられており、そこには、次のような自作の詩句が書かれていた。

母親がどういう理由で亡くなったのか、死者の年齢も、この詩句を書いた娘の年齢もわからないが、亡くなった母を悼み、母を喪失した寂しい感情を綴ったメッセージは、読むものの心を打つ。このメッセージは、雨に濡れないようにビニールで覆う程度の簡略なものであり、ごく一時的で仮のものであることは、このメッセージがもつ性質をよく表している。

このメッセージは、母が亡くなって間もないときの心情を訴えたものであり、喪のプロセスの進行と共に、ことばの内容は、時間と共に変化していくであろう。娘も、これと同じことばを墓石に刻みたいとは思わないのではないだろうか。メッセージを墓石に刻もうとするとき、人はそのことばを「永遠」に残そうとする。それに対して、コミュニケーションのためのメッセージとしては、「現在」の気持ちや感情を相互行為として伝えることのほうが重要である。墓場では、「永遠の生」をめざした記憶するための語りと、「現在の生」を生きるコミュニケーションの語りの両方が交差している。喪の途上で語られている事例 5 の語りは、後者にウエイトがおかれている。

このような、生者が死者とコミュニケーションする

事例5 (図8) 現代のヨークの墓地、娘から亡き母へのメッセージ



現代の墓地にみる、娘から亡き母へのメッセージ (ヨーク)

Mum I think about you everyday
My love for you will never stray
If I had just one wish, it would be
To reach out to touch you
Give my love to you and tell you
How much I miss you
From your loving daughter
MANDY

母さん、あなたを毎日想っているから
私の愛は、迷子になんかならない
もし、ひとつだけ願いがかなうなら
手をとどかせて、あなたに触れてみたい
愛をとどけて、あなたに言ってみよう
どれほど淋しいか、あなたがいなくなって
あなたの愛する娘より
マンディ

語りは、生き残った者が死を受け容れ、死者を葬っていく喪のプロセスをあらわすと考えられる。それと共に、生き残った者が死者の何かを記念に残し、死者の何かを受け継いで生きていこうとする生成継承のプロセスをあらわすと考えられる。死を弔うことを、悲哀から受容にいたる喪のプロセスとしてみるだけではなく、生者と死者の関係性の進行、とくに生者と死者のコミュニケーション・プロセスとしてみるということが重要だろう。

墓地では、生者が死者とコミュニケーションする多様な言語的メッセージが行き交っている。これらの語りをもとに、「宛名」がどこにあるかという観点から見ると、大きく分けて3種類あると考えられる。

第1のタイプは、事例5のように、生者が死者に向かって直接語りかけるものである。第2のタイプは、生者が人間以外のもの(神、仏、超越的なもの、自然など)に向かって、死者の冥福や願いや祈りをささげる語りである。たとえば、「どうか安らかに眠ってください」というような語りである。第3のタイプは、生者が死者のことを、墓場を訪れる多くの人々に向かって語りかけるものである。たとえば、「私の母は、家族みんなから愛されるやさしい人でした」というような語りである。

事例5は、墓碑を建立する前の埋葬地にある「喪の途上」の語りであるが、第1のタイプのきわだった例であり、死者に向かって直接訴えかけるものである。

III-2 現代イギリスの子どもの墓にみる死者へのメッセージ

新しい墓地のなかでも、事例5よりも死後の時間が経過した墓碑の例を見てみたい。事例6~事例9(図9~図12)は、20世紀末から21世紀初頭の現代イギリスの墓地において、子どもを亡くした親が建てた墓碑の例である。

まず、これらの墓碑を、事例5と同様に、「宛名」が異なる3種類のコミュニケーションのタイプという観点から見てみたい。それは、1) 死者本人に向かって語る、2) 死者に対する願いや祈りを、神など人間を超えるものに向かって語る、3) 他者(墓地を訪れる観客や聴衆)に向かって死者を語るという3タイプである。事例6~9で特筆されるのは、ひとつの語りがひとつのタイプに分類されるというよりは、短い言葉が、これら3つの「宛名」に同時に向かう多機能を持つと考えられることであろう。

たとえば、「私たちの想いのなかで永遠におやすみ

事例6～9 現代ヨークの墓碑にみる、親から死んだ子どもへのメッセージ

事例6 (図9) 0歳 死産



| | |
|---|---|
| LEWIS ANDREW MILLER BORN SLEEPING 20 TH JAN 1998 SWEET DREAMS ALWAYS LOVE MUMMY & DADDY | ルイス・アンドリュ ー・ミラー 眠って生まれ た 1998年1月20日 いつも甘い夢を 愛してる 母さんと父さん |
|---|---|

事例7 (図11) 0歳 生誕1日



| | |
|---|--|
| LAURAN PAIGE SMITH Born 14-2-01 Died 15-2-01 Our Little Angel Forever In Our Thoughts Goodnight Godbless | ローラン・ペー ジ・スミス 2001年2月14日 誕生 2001年2月15日 死去 私たちの小さい 天使 私たちの想いの なかで永遠に おやすみ 神の 祝福を |
|---|--|

事例8 (図10) 0歳 生誕3日



| | |
|---|---|
| JACK ELVIS DAVISON 8.1.1999-11.1.1999 OUR SPECIAL GORGEOUS BOY NIGHT NIGHT SLEEP TIGHT | ジャック エルヴィス ダヴィソン 1999年1月8日～ 1999年1月11日 私たちの特別に すばらしい男の 子 夜よ 夜よ 眠れ ぐっすり |
|---|---|

事例9 (図12) 12歳



(家族墓碑で右は空白になっている)

| | |
|--|--|
| Cherished STEPHAN ADAM GLASBY 14.5.1986-27.3.1998 Your smile is engraved upon our hearts. We will always love you Mum & Dad | 大切な ステファン・ア ダム グラスビー 1986年5月14日 ～1998年3月27日 あなたの微笑みは 深く刻まれている 私たちの胸に。 私たちはいつまでも あなたを愛しつづ けるでしょう。 母さんと父さん |
|--|--|



図 13 めいぐるみ等で飾られた子ども墓地



図 14 新しい子ども埋葬地の装飾

神の祝福がありますように（事例 7）「私たちはいつまでもあなたを愛しつづけるでしょう（事例 9）」という言葉は、死者に直接向けられた第 1 のタイプであると同時に、祈りの機能をもつ第 2 のタイプでもある。事例 5 との違いは、語りの宛名が死者個人に向かうだけではなく、同時に個人を超える聖なるもの（「神」や「祈り」や「永遠」）に向かっていることである。また、事例 5 では「過去」の喪失（missing）や喪失の回復を願う語りであるのに対して、「永遠」「いつまでも」という形容詞や「未来形」で語られていることも特徴である。語りの宛名の違いは、言葉を投げかける時間軸の方向性（未来）と、時間的な射程の長さ（永遠）にかかわると考えられる。なお、「愛」という言葉は、どのタイプにも使われるのだが、事例 5 では「私の愛をあなたにとどける」「あなたの愛する」という表現で語られる具体的で個別の愛であるのに対して、事例 6 では、主語も目的語もなく「愛している（ラブ）」一語だけで表され、より一般化され簡潔で結晶化された言葉になっている。

「眠って生まれた（事例 6）」「私たちの小さい天使（事例 7）」「私たちの特別にすばらしい男の子（事例 8）」などの語り例は、死者の特徴を他者に説明する第 3 のタイプである。しかし、同時に、死者本人に語りかける第 1 のタイプの機能も持つ。また特に後の 2 例は、「天使」「特別にすばらしい」など、第 2 のタイプの言葉ともつながって生者の領域を超える「聖なる装

飾」で飾られている。

これらの 3 つのタイプが混じる語りは、先に考察した 19 世紀の墓碑銘でもみられた。また、死者が葬られた場所（墓地）の語りだけではなく、事故で亡くなった場所（死の現場）の追悼の語りにおいても共通していた（やまだ，2004）。ただし、墓地の語りよりも事故死の現場の語りのほうが、第 3 の機能、つまり現場を訪れる他者へ向かう方向性やメッセージ機能が強くなり、私的な死ではなく公共性をもった社会的死という意味づけやアピールがより強くなる傾向がみられた。

墓地は、一見すると寡黙な静寂な場所であるが、そこは、さまざまな言語的・非言語的な声が交差している多様なコミュニケーションの場としても見ることができる。事例 6～9 は、非言語的コミュニケーションという観点から見ても興味深い事例である。墓は、写真で示すように、めいぐるみなどかわいらしい子ども用グッズで飾られていた（図 9—図 14 参照）。

墓地では、生者と死者とのコミュニケーションは、狭義の言語によって語られるだけではなく、広義の言語である「非言語的コミュニケーション」によって多様な媒体によって語られる。たとえば、「墓地の形態」や「墓石のデザイン」、「花」をたむける、「石」を置く、宗教的な「記号」（十字架や天使など）を記す、生前死者が好きだった「食物」や「事物」を供える、「線香」や「水」を供えるなど、多様なコミュニ

ケーション方法がとられる。墓地では、非言語的コミュニケーションが多用されるが、それは「この世」の感覚を超える世界と交流しようとするためであろうか。

現代イギリスの子どもの墓は、定型の墓石の様式から出ていることが多いためか、墓場のなかでも華やかで目立っている。墓石もハート形、熊の形、天使の形、本の形、花の形などさまざまであった。墓の周りには白い石が敷き詰められたり、種々のカラフルな花でおおわれたりして、デザインもさまざまに凝っていた。埋葬されたばかりでまだ墓石もない新しい墓（図14）はもちろん、建立されて月日がたった墓でも多くの花が絶えないで飾られており、手入れもきれいなされていた。

墓は、天使の彫像や人形、熊やウサギなどのぬいぐるみ、光をはなつ灯り、風車、造花、かご、ミニチュアのおもちゃなど、親の子どもにたくす想いのありたいすべてを形にしたような、かわいいグッズで盛りだくさんに飾られていた。

墓はいつも美しく飾られ、おもちゃは新しく次々に追加されているのだろう。これらの盛りだくさんの子ども向けのおもちゃは、この墓地が亡くなった子どもたちと親とがここで共に生きている場所であることを示しているように思われる。両親は、この墓地へ来ては子どもたちに語りかけているのだと考えられる。

これら子どもの墓石の墓碑銘に記された亡き子どもへのメッセージは、先にも見たように、親が子どもを亡くしたときの悲しみと愛おしさ、子どもに安らかな眠りを祈る親の想いが、限られたスペースと短い厳選されたことばに凝縮されており、気持ちがストレートに伝わってくるものが多い。

これらの意匠をこらした墓地のデザインや装飾は、言語による語りの3つのタイプと同様の機能をもっていると考えられる。第1には、亡き子どもに向けられる語りであり、第2には、聖なる天使や神への祈りを託し、第3には、墓地を訪れる人々に、我が子が短いのちであったけれど、この世に生きていたことを示すメッセージにもなっている。特に生まれたばかりの乳児の場合には、両親以外にはほとんど誰にも知られずに亡くなり、社会的には生きられず、人々に認知されなかった子どもたちであるから、せめて墓地のなかで人々の目に触れて生かしてあげたいと願うのではな

いだろうか。

死者を弔う場所にぬいぐるみが多く置かれるのは、子どもの墓であるから当然ともいえる。とりわけイギリスではテディ・ベアは広く親しまれている。しかし、よく似たぬいぐるみや人形たちは、同時多発テロ事件で多くの人が亡くなったアメリカのグラウンド・ゼロの場所で、大人の死の追悼品としても大変多く飾られていた（伊藤，2004；やまだ，2004）。なぜ、ぬいぐるみが死の現場や新しい墓に飾られるのだろうか。それには何か暗黙の意味があるかもしれない。次のような理由が考えられる。

1 つめには、死者を慰め、墓地を訪れる生者をも慰める「慰撫」の品としての機能があると考えられる。ぬいぐるみは、花などと同様に、死者も生者も無条件に慰め、ほっとさせる。ぬいぐるみは、安らぎや癒しをもたらし、寂しい場所に華やぎをもたらし、人の気持ちを元気づける効果をもつだろう。

2 つめには、死者の「お供」としての機能があると考えられる。死者をひとりぼっちにしておくのは、寂しすぎる。死者には、おもちゃ、従者、友達、ペットの代わりなど、現代版の「土偶」が死者のお供をしているのかもしれない。

3 つめには、死者の身代わりの「人形（ひとがた）」としての機能があると考えられる。ぬいぐるみは生者に訴えかける無言のメッセージをもつ。あどけない表情の熊のぬいぐるみは、無垢な子どものつぶらな瞳のように愛くるしい表情で私たちに訴えかける力をもつ。ぬいぐるみが、墓地に置かれ冷たい雨に濡れていれば、それを見る私たちにとっては、単なるモノとして看過できない感情、罪のない子どもに対するような「哀れ」な気持ちをかきたてられる。ぬいぐるみは、死者の代わりの「人形（ひとがた）」の役目もしているのかもしれない。

家族の墓地のなかでも、もっとも心を深く揺さぶられるのは、親が造った子どもの墓である。なぜなら、親にとって子どもの死は、「許し難い死」の筆頭にあるからである。しかし、先に考察した19世紀の家族墓と、事例6～9の現代の墓を比較すると、子どもの墓の歴史の変遷も見られる。事例3では、幼児期になくなった子の墓は後でまとめて素っ気なく記されている。この時代には、死産や生後数日で亡くなった子は、

墓どころか「子ども」の内に入らなかったかもしれない。

アリエス (Ariès, 1983/1990) によれば, 19 世紀から, 死は怖れて遠ざけられるものではなくなり, 死は日常生活のなかにあふれ, 人は死とともに生きることに満足を見いだすように変化したという。それは, みずからのために怖れおのくような死でもなければ, 油断に乗じて人を襲う死でもなく, 「愛する人を奪い去る死, すなわち他者の死」というモデルができてきたことを意味する。そして, 「死にそなえるよりも, 死者の思い出を保持する」ようになり, 服喪が拡大し, 思い出が崇拜され, 墓地通いや墓参りが行われるようになってきた。墓地は家族が巡礼のように訪ねる場になり, 追憶の場が変わった。

アリエスによれば, 子どもの墓にも歴史的变化がみられるという。16 世紀以前には子どもの墓碑は存在しないか例外的なものであった。ようやく 19 世紀ころから, 子どもの墓碑が墓地に現れるようになったという。やがて, 子どもを死者としてよりも生者として示そうとする意志が明確になってきた。子どもは「葬儀社の最良のお客さん」になり, 「墓におけるドラマの第一の主人公」になってきたという。

多産・多死の時代とは異なり, 現代では幼い子どもの死も, 特別な墓で手厚く葬られることが多い。家族のなかでの子どもの位置も, 親が子どもの死にたくす想いも大きく変わったと思われる。

事例 6~9 で見たように, 現代イギリスの墓地において, 子どもの墓は, 生者と死者のコミュニケーションが交わされる特別な劇場のような装いをしている。特に子どもの墓地は, 家族ライフストーリーが濃密に語られる生きた博物館だといってもよいかもしれない。先に考察した 19 世紀後半から 20 世紀前半の墓で, 幼い子どもの死が軽く扱われていたのとは, 対照的である。

IV まとめ

この論考では, イギリスの墓地の観察事例を基に, 特に「生者と死者のコミュニケーション」という心理

学的観点から, 家族ライフストーリーが語られる場所としての墓地について考察した。まず第 1 には, 家族ライフストーリーが語られる記憶の「場所」として, イギリス 19 世紀末から 20 世紀前半の家族墓碑をとりあげて, その特徴を調べた。第 2 には, 20 世紀末から 21 世紀初頭のイギリス墓地にみられる死後間もない死者と生者のコミュニケーションを, 特に親や子が死者に語りかけるメッセージや墓を飾る非言語的な装飾に注目して考察した。

墓地で語られる家族ライフストーリーには, 少なくとも 3 つの特徴がある。第 1 には, 通常の伝記やライフストーリーが誕生を基点に語られるのに対して, 「死」を基点に語られるという特徴を持つ。個人の人生は時間進行とは逆方向に, 死のとき(命日)を中心に単純なかたちで凝縮して語られる。第 2 には, 墓地の語りは, 死者が自分の人生について語るものとは異なり, 生者による死者についての語りであるので, 死者を祀る親近者とともに家族との関係性を反映する。墓場は, 愛する親子という家族の物語や家族の関係性が凝縮した濃密なかたちで繰り返し語られる場である。第 3 には, 墓地は, 現在という時点で生者と死者の濃密なコミュニケーションが行われる場であると同時に, 100 年以上たっても過去世代から未来世代へと何かを伝え, 長い時間軸でコミュニケーションできる力をもつ。世代を超え, 文化を超え, 生と死の境界を超えてライフ(いのち・生・人生)の物語を伝えているといえるだろう。

墓地における生者と死者とのコミュニケーションの特徴としては, 語りの「宛名」の多重性があげられる。1) 死者本人に向かって語る, 2) 死者に対する願いや祈りを, 神など人間を超えるものに向かって語る, 3) 他者(墓地を訪れる人々・観客や聴衆)に向かって死者を語るという 3 タイプがみられた。墓碑銘では, この 3 つの宛名に同時に向かう語りも見られた。

墓地の語りは, 墓碑銘に記された言語的な語りだけではなく, 墓碑の形や装飾など非言語的にも多重なメッセージとして語られていた。本論では, そのなかでも特に「ぬいぐるみ」に注目し, それには「慰撫」「お供」「人形(ひとがた)」の意味が含まれるのではないかと考察した。

従来のライフストーリー研究や生涯発達心理学の研

究では、「個人」が中心であった (Yamada, 2004)。それらの研究では、誕生から死までに起こる個人の人生や、個人の人生のなかで起こるライフ・イベントに関心を集中させてきた。それに対して本研究では、死を中心としたライフストーリー、家族など身近な人々との関係性を含む集合的なライフストーリー、世代間伝達を含む長い時間軸の語り、生者と死者のコミュニケーションなど、重要な観点を提示できたと考えられる。死は、その死者の人生にとってのライフ・イベントであるだけでなく、その周囲の人々をまきこんで、人間関係のライフ・イベント、世代継承のライフ・イベント、地域共同体的、あるいは「場所」的ライフ・イベントとして行われる。死には、生者と死者の語りの相互行為という意味でのコミュニケーションが含まれているのである。また、生者と死者のコミュニケーションは、生者が死者を看取るプロセス、死者を亡くした直後の喪の語り、死の現場での追悼、死者を亡くして年数を経たあとの語りなど、一連の時間プロセスのなかに位置づけて「墓地の語り」を見ていく視点が必要だと考えられる。

墓地の心理学的な考察は、まだはじまったばかりであるが、墓地は、死の側から人間のライフストーリーが語られている場所、世代継承という長い時間軸のなかで物語が語られている場所であり、生者と死者が現に生きたコミュニケーションを行っている心理的場所として三重の観点からとらえることによって、興味深い視座が開けるであろう。

謝 辞

ヨーク墓地の写真の一部は、筆者と同行した加藤義信氏の撮影による。使用を快諾してくださった氏に感謝する。

本研究には、科学研究費基盤研究 (B) (2) 「人生サイクルと他界イメージの多文化比較による生命観モデルの構築」(代表者 山田洋子)、科学研究費基盤研究 (B) (1) 「フィールドの語りをとらえる質的心理学の方法と教育」(代表者 山田洋子)、および「21COE 京都大学心理学連合」の援助を受けた。

引用文献

- Ariès, P. (1983). 死と歴史。(伊藤晃・成瀬駒男, 訳). 東京: みすず書房. (Ariès, P. (1975). *Essais sur l'histoire de la mort en occident: Du moyen age à nos jours Paris: Seuil.*)
- Ariès, P. (1990). 死の文化史。(福井憲彦, 訳). 東京: 日本エディタースクール出版部. (Ariès, P. (1983). *Images de l'homme devant la mort. Paris: Editions du Seuil.*)
- Brontë, A. (2001). アグネス・グレイ。(田中晏男, 訳). 京都: 京都修学社. (Brontë, A. (1847). *Agnes Grey. London; Thomas Cautley.*)
- Brontë, A. (1996). ワイルドフェル・ホールの住人。(山口弘恵, 訳). 東京: みすず書房. (Brontë, A. (1848). *The tenant of wildfell hall. London; Thomas Cautley.*)
- Brontë, E. (1847). *Wuthering heights. London; Thomas Cautley.*
- Glaser, B. & Strauss, A. L. (1988). 「死のアウエアネス理論」と看護: 死の認識と終末期ケア。(木下康仁, 訳). 東京: 医学書院. (Glaser, B. & Strauss, A. L. (1965). *Awareness of dying. New York: Aldine Publishing.*)
- 堀 一郎. (1953). 我が国民間信仰史の研究 (二) 宗教史編. 東京: 東京創元社.
- 堀 一郎. (1955). 我が国民間信仰史の研究 (一) 序編・伝承説話編. 東京: 東京創元社.
- 星野道夫. (1996). 森と氷河と鯨. 東京: 世界文化社.
- Howard, T. (1995). *Brontë country. London; Caxton editions.*
- 伊藤哲司. (2004). 「グラウンド・ゼロ」での犠牲者追悼のかたちと 9.11 「同時多発テロ」の位置づけ: テロ事件 11 ヶ月後のニューヨークを歩いて. 「人生サイクルと他界イメージの多文化比較による生命観モデルの構築」平成 13~15 年度科学研究費研究成果報告書 (代表者 山田洋子). (pp.205-218) .
- 岩田重則. (2003). 墓の民俗学. 東京: 吉川弘文館.
- Jupp, P. & Howarth, J. Eds. (1997). *The changing face of death: Historical account of death and disposal, Basigstoke: Macmillan.*
- 木村 博. (1989). 死: 仏教と民俗. 東京: 名著出版.
- 近藤直也. (1982). 祓いの構造. 大阪: 創元社.
- Kübler-Ross, E. (1971). 死ぬ瞬間: 死にゆく人々との対話。(川口正吉, 訳). 東京: 読売新聞社. (Kübler-Ross, E. (1969). *On death and dying. New York: Macmillan.*)
- Levi-Strauss, C. (1976). 野生の思考。(大橋保夫, 訳). 東京: みすず書房. (Levi-Strauss, C. (1962). *La pensee sauvage. Paris: Librairie Plon.*)
- Macnab, F. (1994). 喪失の悲しみを越えて: 新しい旅立ちへのサイコセラピー。(福原真知子他, 訳). 東京:

- 川島書店. (Macnab, F. (1989). *Life After Loss: Getting over Grief, Getting on With Life*. Newtown; Millennium Books.)
- McManners, J. (1989). 死と啓蒙：18世紀フランスにおける死生観の変遷. (小西嘉幸・中原章雄・鈴木田研二, 訳). 東京：平凡社. (McManners, J. (1981). *Death and the enlightenment: Changing attitudes to death in eighteenth-century*. France. Oxford: Oxford University Press.)
- Metcalf, P. & Huntington. (1996). 死の儀礼：葬送習俗の人類学的研究. (池上良正・池上富美子, 訳). 東京：未来社. (Metcalf, P. & Huntington. (1991). *Cerebrations of death: The anthropology of mortuary ritual*. 2nd.ed. Cambridge: Cambridge University Press.)
- Norberg-Schulz, C. (1994). ゲニウス・ロキ：建築の現象学をめざして. (加藤邦男・田崎裕生, 訳). 東京：住まいの図書館出版局. (Norberg-Schulz, C. (1979). *Genius Loci: paesaggio ambiente architettura*. Milano : Electa.)
- 佐藤米司. (1971). 葬送儀礼の民俗. 東京：岩崎美術社.
- Smith, R.J. (1996). 現代日本の祖先崇拜：文化人類学からのアプローチ. (前山 隆, 訳). 東京：御茶の水書房. (Smith, R.J. (1974). *Ancestor worship in contemporary Japan*. Stanford: Stanford University Press.)
- 梅原猛・中西進編. (1996). 霊魂をめぐる日本の深層. 東京：角川書店.
- 柳田國男. (1929). 葬制の沿革について. 定本柳田國男集 (1969). (pp.499-520). 東京：筑摩書房.
- 柳田國男. (1934). 葬制沿革史料. 定本柳田國男集 (1969). (pp.521-549). 東京：筑摩書房.
- 山折哲雄. (1990). 死の民俗学：死生観と葬送儀礼. 東京：岩波書店.
- やまだようこ. (1997). いない母のイメージと人生の物語. 濱口恵俊 (編), 世界のなかの日本型システム. (pp.281-300). 東京：新曜社.
- やまだようこ (編). (2000a). 人生を物語る：生成のライフストーリー. 京都：ミネルヴァ書房.
- やまだようこ. (2000b). 喪失と生成のライフストーリー：F1 ヒーローの死とファンの人生. やまだようこ (編), 人生を物語る (pp.77-111). 京都：ミネルヴァ書房.
- やまだようこ. (2000c). 死にゆく過程と人生の物語. カール・ベッカー (編), 生と死のケアを考える (pp.45-65). 京都：法蔵館.
- やまだようこ. (2004). 事故死の「現場」における生者と死者のコミュニケーション：ニューヨーク, グラウンド・ゼロにおける追悼の語り. 「人生サイクルと他界イメージの多文化比較による生命観モデルの構築」平成 13-15 年度科学研究費研究成果報告書 (代表者 山田洋子) (pp.209-229) .
- Yamada, Y. (2004). The generative life cycle model: Integration of Japanese folk images and generativity. de St. Aubin, Ed., McAdams, D.P., & Kim, T.C. Eds. *The generative society: Caring for future generations*. (pp.97-112). Washington, DC: American Psychological Association.
- Yamada, Y. & Kato, Y. (2001). Images of the soul and the circulatory cosmology of life: Psychological models of folk representations in Japanese and French youths' drawings. 京都大学教育学部紀要, 47, 1-27.
- Yamada, Y. & Kato, Y. (2004). Japanese students' depictions of the soul after death: Towards a psychological model of cultural representations. Formanek, S. & Lafleur, W. (Eds.) *Practicing the afterlife: Perspectives from Japan*. (pp.417-438). Wien: Austrian Academy of Sciences Press.
- やまだようこ・河原紀子・藤野友紀・小原佳代・田垣正晋・藤野志穂・堀川学. (1999). 人は身近な死者から何を学ぶのか；阪神大震災における「友人の死の経験」の語りより. 教育方法の探究, 2, 61-78. 京都大学大学院教育学研究科.
- やまだようこ・田垣正晋・保坂裕子・近藤和美. (2000). 阪神大震災における「友人の死の経験」の語り語り直し. 教育方法の探究, 3, 63-81. 京都大学大学院教育学研究科.

(2004.2.24 受稿, 2004.9.16 受理)